

エディトリアル

練馬光が丘病院放射線科 部長 伊藤大輔

今回の特集は原発性アルドステロン症についての特集である。放射線科医がなぜアルドステロン症の特集？と思う方がいるかもしれない。実は練馬光が丘病院放射線科はアルドステロン症の診断に必須な副腎静脈サンプリングのメッカなのである。

本論でも軽く触れてはいるが、副腎静脈サンプリングのうちの支脈採血という技術は当院の牧田幸三が世界で初めて成功させた技術である。まさに地域発の新規技術といえる。この支脈採血で得られた知見をもとに、近年では副腎腺腫に対する部分切除や、腺腫に対するラジオ波焼灼術も可能になってきている。最近ではコロナ禍で症例が減少してはいるが、練馬光が丘病院には副腎静脈サンプリングの施行依頼が大学病院を含めたさまざまな病院からあり、採血手技を施行している。その他にも筆者を含めた放射線科医師が、副腎腺腫に対するラジオ波治療における治療指針の策定委員会に参画したり、副腎静脈支脈採血手技の新規保険収載を目指して厚労省へ働きかけたりするなどの活動を行っている。練馬光が丘病院放射線科にとっては、いままさに原発性アルドステロン症は“熱い”疾患なのである。

では、なぜ地域医療にアルドステロン症？といった疑問があるかもしれない。

実際私自身がアルドステロン症の症例に携わっている印象としては、いまだに“高血圧患者はたくさんいるけれども、アルドステロン症は珍しい病気であり、また治療ができるわけでもないからみつけても仕方がない”，というような考えの方が今も多くいらっしゃる印象がある。だが実際のところ、原発性アルドステロン症は高血圧患者の中で実に8~10%を占めるとされている。本邦に100万人程度の患者が潜在的には存在するのだ。これは決して少ない数字とはいえないだろう。

今回の特集では執筆者の先生方には“アルドステロン症の患者は決して頻度の少ない疾患ではないため、地域医療においても高血圧患者のスクリーニングを行っていただき、きちんと診断をつけていただくことが大切である”というメッセージを前提として、地域医療に役立つようなアルドステロン症に関する知見を伝えていただきたい、ということ趣旨として執筆していただいた。

今回の執筆者の選定と依頼にはみなとみらいメディカルスクエアの大村昌夫先生に大変なご尽力をいただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。なお、大村先生は牧田が初めて副腎静脈支脈採血を行ったときに、その採血を依頼した医師である。今回大村先生のお力により、名実を伴ったまさしくアルドステロン症診療における真の重鎮といえる方々に執筆していただけた。我ながら内容に満足している。

地域医療において高血圧を診療する先生方においては、是非ともアルドステロン症のスクリーニングを積極的に行っていただき、専門家へ紹介するようにならなければならぬと考えている。

もし副腎静脈サンプリング(特に支脈採血)の施行を依頼したいけれどもどこに紹介したらいいかわからない、というような場合は、編集部経由で相談していただけたら、その地域で適切な施設を紹介するようにさせていただきます。